

次の文章はマシュー・サイド著「多様性の科学」(ディスカヴァー・トゥエンティワン社)の一部である。この文章を読み、以下の設問に答えなさい。

人類の創成期において、集団脳が成長する上でもっとも大きな足かせとなったのは社会からの隔絶だった。狩猟採集時代には、地理上に点々と存在する集団が互いに交流する手段はほとんどなかった。農業革命が起きてからは、より近くに集まって暮らすようになったが、各集団の間には物理的・心理的な壁が数々あった。(中略)

しかし今日の我々は、まったく異なる時代に生きている。今や実社会のみならず、デジタル技術を通して世界中の誰とでも一瞬にしてつながれる。多様な意見、信条、アイデア、技術などをクリック1つで目にすることができる。これはもちろん、インターネットの生みの親、ティム・バーナーズ=リーが当初描いていたビジョン——科学者たちが研究結果や新たな情報やアイデアを共有できる世界——だ。おかげでさまざまな融合のイノベーションが生まれ、インターネットは人類にとって大きなプラスとなってきた。

しかし多様性豊かな環境は、矛盾した現象ももたらす。インターネット上でも実社会でも同じことが起きる。世界が広がるほど、人々の視野が狭まっていくのだ。多様な学生が集まる大規模なカンザス大学では、画一的なネットワークが生まれ、多様なビジネスマンが集まる交流イベントでは、顔見知りとばかり話す傾向が見られた。

これは現代社会における特徴的な問題の1つ、「エコーチェンバー現象」[同じ意見の者同士でコミュニケーションを繰り返し、特定の信念が強化される現象]につながる。インターネットは、その多様性とは裏腹に、同じ思想を持つ画一的な集団が点々と存在する場となった。まるで「 ① 」に舞い戻ったかのような。情報は集団間より、むしろ集団「内」で共有される。ただしエコーチェンバー現象は常に問題というわけではない。たとえばファッションが好きな人なら、特定の掲示板に行って同じ好みの人同士で話がしたいと思うだろう。そこに建築やサッカーやエクササイズの話をする人たちが割り込んできたら楽しめない。多様性は邪魔になる。

しかし政治問題など複雑な話題について情報を探す場合、多様性を排除してしまうと、エコーチェンバー現象によって現実が歪んで見え始める。たとえばFacebookやその他SNSから情報を得ようとする、一番目にしがちなのは、友人がシェアする情報だろう。つまり自分と考え方が合う人の意見、あるいは自身の意見を裏付けてくれる情報に触れる機会が多くなる。反対意見に触れる割合はずっと低い。この傾向はいわゆる「フィルターバブル」によってさらに強まる。インターネットでは、Googleに代表される検索サイトのアルゴリズム(つまり特定のフィルター)が、利用者の好みに合わせて検索結果をふるいにかけている。そのため利用者が好む情報、すでに信じている情報ばかりが表示されやすくなる。まるで泡(バブル)の中に閉じ込められたようになって、多様な意見や視点へのアクセスが制限されるのだ。

第1問 「 ① 」にあてはまる言葉を書きなさい。

第2問 エコーチェンバー現象とフィルターバブルの違いを75字以内で要約して説明しなさい。

第3問 多様な意見や視点に触れることができず失敗したことについて、あなたの中高生時の経験を元に記し、さらにそれに対してどのように対応すれば良かったと思うか書きなさい。(400字以内)